



# 龍族

RYUZOKU  
第24号

南天会  
令和4年  
12月8日



## 続々と龍族

小林 三旅

南天会フェイスブックにメールが届いた。高橋浄久さんというお坊さんからだ。

「こんにちは！ZOOM誕生会でご挨拶させて頂いた仁和寺で得度した真言宗の僧侶、高橋浄久と申します。佐々井さんよりZOOM誕生会でナグプールに伺いたい旨お伝えしたところ、是非お越しくださいとおっしゃって下さいまして現在インドのムンバイに滞在しております。15日から19日くらいまでナグプール滞在を検討しております、お目にかかる機会がありましたら是非お伺いさせて頂きたく存じます。」

その日は13日、明後日とはずいぶん急な話だな、と思いながら、明日現地に確認します、と返信した。確かに一月ほど前のZOOMの誕生会の中でそんな約束を

されていたが、こんなに早く向かっているとは、と驚いた。翌日14日の午前中にバンテージに電話したが通じず、明日ナグプールへ到着されるということもあり、何ともあれ、ということでもバンテージの携帯番号とお寺の住所を返信した。バンテージに会いたいと言っている人がどんな人なのか、それはバンテージが直接判断されることなので、事務局員の私はなるべく忖度せずに携帯番号はお伝えするようにしている。

しかし、やはり一体何者なんだろう？と、少し心配になった。メールの後、高橋さんのことをネットで検索した。高橋浄久さんと相棒の小野裕史さんの旅の経緯はいくつかのSNSで投稿されていた。youtubeで行き先を決めないインド旅行記を配信する予定らしい。なるほど、急な連絡も今時のyoutuberのノリなんだな。面会が実現するまでいくつもの壁があることを想像していたのだろう、お二人は映像の中でバンテージの携帯に直接電話して翌日に会うことができたことに、驚き、感激していた。私も同じような思い出があった。2004年、取材の相談で故山際素男先生と新宿でお会いしたとき、取材 交渉の最後、直通の携帯番号を教えてくださいました。あの「破天」の主人公とこんなに簡単に話すことができるんだ、日本からインドへ電話した時の高揚感を未だによく覚えている。さらには小野裕史さんはこの出会いがきっかけとなり、「お前も坊主になれ！」というバンテージの有無を言わずにぬ迫りに押されたのか、今年開催された大改宗記念式典にて得度してしまった。私たちはバンテージから受戒、得度を受けた仲間を「龍族」と呼んでいる。おそらく日本に百人は下らない人がいると思われる、新しい「龍族」の誕生だ。小野さんは「龍光」という名を授かり活動を始めているそうだ。SNSでも龍光さんの出家は大反響だった。投稿をいろいろ読むと龍光さんはその界限で有名な投資家らしい。えらい人が弟子になったものだ。否、「破天」の続きを生きる私たちにとって、ふさわしい登場人物なのかもしれない。ともあれ、バンテージとともに今の時代を歩める仲間が増えたことを喜びたい。

そういえば、私も何年前か「龍命」という名前を頂き、3日ナグプールで僧として生活したことがある。その時、初めて頂いた50ルピーのお布施は今も大事に部屋に飾っている。だが、授かった袈裟は、残念ながら、日本ではまだ一度もつけていない。

と、言うわけで次のページへ、新しい龍族にバトンを渡すことにしよう。

得度にいたる旅

小野龍光

南天会のみなさま、はじめまして。小野龍光と申します。2022年10月ナグプールでの大改宗祭にて佐々井上人のもとで得度させて頂きました。佐々井上人よりお声がけ頂き、得度にいたるまでの出来事を寄稿させていただきます。



突然届いた、親友からの袈裟姿

「もしかしたら、インドから帰ってきたら、出家しちゃってるかもね(笑)」  
 なかば冗談で言いながら、私が片道切符でインドに旅立ったのは2022年の9月9日。まさか1ヶ月後に、それまで存在も知らなかった佐々井上人の許で、アタマを丸めてしまうとは思ってもよらなかった。

様々なご縁により、これまで築き上げたネットペンチャーの会社の代表の座から去ることが決まったのは2022年の8月。その先は、まだ何も決まっていなかった。

47歳とはいえ、今までの経験があれば、まだまだ同じ業界で十分闘えるだろう。でも、このままでよいのだろうか？そう、今後の生き方を悩んでいたある夜、常に風来坊のような人生をしている親友の高橋から突如、1通のFacebookメッセージが本人の袈裟姿の写真と共に届いた。

「仁和寺で、得度したった(笑)」



いつも、唐突に大真面目でおもしろおかしく、何かをしでかす彼ではあったのだが、あまりの衝撃さに、返事の文字を打つ指もおぼつかない。

「ギャグじゃないよね? どういうこと?」

アタマの理解が追いつかない一方で、「なんだろう? してやられた!」という不思議な羨望のココロがザワザワと立ち上がる。

「すぐにうちに来い! 話しを聞きたい! ただし! その袈裟を着た状態で来てくれ!」

それから4日後、「まだ着方よくわかんない」と言いつつも袈裟姿で現れた高橋は、見た目だけは「坊さん」そのものだった。

「すごいじゃん! すっかりお坊さんじゃん!」

ただし、私はもちろん、得度したての高橋ですらも「袈裟は左肩を隠すべきもの」という知識すら備わってなかった(汗)。

嬉しそうに右肩を袈裟で隠した姿でお天道様の下を闊歩し我が家に上がりこんだ高橋は口を開いた。

「法要とかお墓参りとかき、仏教ってウチらの日常でも一応、存在してるじゃん？なのに、仏教と心の接点が薄いのも、もったいないと思うんだよね。宗教とかって難しいこといわずに、もっとポップに仏教と接続したいな〜ってき。しかも、お坊さんになったら、なんだか世界の人たちと仲良くなれそうな気がしてき〜」

「ものすごい決断」と他人からは感じられる事を、いつでもニコニコとカジュアルにしないでかす高橋らしい物言いで、得度の経緯を語りだす。

理屈ではよく分からない。しかし、私はココロでは納得感を感じる自分が抑えられなくなってくる。

「オマエ、YouTubeでアーティストをデビューさせたことあるじゃん。ボウズ姿のオマエが世界を回って友達をつくらせていきながら、カジュアルに仏教との接点をつくらせていく様子をYouTubeで発信してみたら、面白いんじゃないかな。ちょうど俺も会社を辞めて時間ができるから、やったことはないけど、YouTubeカメラマンとしてオマエを撮影してついていくよ。そんなふうには、二人で世界へ旅に出よう〜」

私と高橋は、もともと仕事の接点もまったくない。たまたまインターネットを通じて出会った二人だ。だけど「ご先祖さま」とか「縁(えにし)」を重んじる価値観は、共通していた。

「せっかく世界を旅するんなら、観光地じゃなくて、誰かに会いに行く旅がいいな。友達の友達に会いに行きみたい」高橋らしい、面白い視点である。

「いいねーじゃあき、ネット上で、面白い友達を紹介してもらって、その人がいる所に会いに行ってみようぜ！」

そうして、高橋の元に「この国に、こんな人がいるから会いに行ってみては」という様々なコメントがFacebook上で集まった。

その「面白い友達」候補の一人として紹介されたのが、佐々井秀嶺上人であったのだ。

インドにいる、すごい日本のお坊さん？

その数日後、高橋が興奮しながら私にFacebookメッセージを送ってきた。

「友達から、『お坊さんになったんだったら、インドにすごい日本人のお坊さんがいるよ。会いに行ってみたら？』って連絡あったんだよね。佐々井さん？って人？、なんかスゴい人いるみたいだよ」

「インドって、仏教が起こった場所？みたいだから、お坊さんにはピッタリだし、もしかしたら、その佐々井さんって人に会えるかもしれないし」

無知というものは恐ろしい(汗)。

当時の我々は、仏教の発祥地がインドという知識すらあまいで、インド仏教会のトップを「友達の友達」感覚で、ひとまず会いに行ってみようと考えてしまったのだった。

「考えていたって何も始まらないから、まずは動いてみよう〜」とのことで、私と高橋は、インドへの出発日を、何の根拠もなく、約1ヶ月後の2022年9月9日と決めた。

「せっかくだから、インドにどの空港から入るかも、誰かにオススメしてもらって決めちゃおう〜」

その結果、聞いたこともない「トリバンドラム」というインド南端に近い都市から入国することも決まった。

それ以外の全ての旅程は、もちろん宿泊も含め、なにも決まってない。帰りの日程すら分からない。

「あとは、ネットで友達の友達を紹介してもらいながら、行き先もみんなに尋ねながら旅をしよう〜」

高橋にとっては初めてのインドのだが、私はそれまで何度、バックパッカーとして訪れていた。

実は、ブッダガヤまで行ったこともあった。

にも関わらず、「佐々井秀嶺」なるお方の存在すら、恥ずかしながら全く知らなかった。

インド出発までの日々、インドで会うかもしれない佐々井上人に興味をわき、まずはネットで検索して発見した、白石あづきさんの「世界が驚くニッポンのお坊さん 佐々井秀嶺、インドに笑う」を手にとってみる。

読むにつれ、佐々井上人の人生の衝撃さに、ページをめくる手が止まらなくなる。

なんなんだ、この御方は。今までイメージしていた仏教と全然違う！ひたすら、目の前の人をだれであっても救おうとする。信念を曲げずに、国や大統領相手にだって、人を救うために命を張っている！すごい生き様じゃないか！何で今まで知らなかったんだ！絶対に会ってみよう！

すぐに読了し、「破天」も読み始めた。

こうして、インドの旅が始まるまでには、佐々井上人にお会いするのが、自分の中で「今回のインド放浪の最大の目的」となっていた。しかし、佐々井上人について知るほどに「こんな、ど偉い方になって、簡単に会えるはずがない」と勝手にココロのハードルをあげてしまう自分がある。

そのハードルをぶち壊してくれるのが、高橋だった。

インド入国から徐々に北上し1週間、ムンバイにいた時であった。

Facebookで「佐々井秀嶺資料室」のページを見つけ『佐々井さんにご挨拶に行きたい』とメッセージを送った高橋が「『佐々井秀嶺資料室』の小林さんから、佐々井さんの直通的の携帯電話番号教えてもらっちゃった!」と。

ちよつと待つてよ!自分にとつてはダライ・ラマクラスの超大物だよ。いきなり直通電話番号とか、意味不明でしょ!

もう、興奮しすぎてアタマが追いつかない。

気がつけば、なぜだか正座をしながらも、高橋に「す、すぐに佐々井さんに電話して!今すぐ!」とせつづく自分がいた。

コールがなる。

ブルブル・・・、ブルブル・・・、ブルブル・・・。

しばし、沈黙。

「あ!もしもし?佐々井さんですか? わたくし、高橋淨休と申しまして。。。」

「え? ナグプールで、明日会えるんですか? わかりました! すぐ行きます!」

高橋が佐々井上人と電話している間、自分は、ほぼ呼吸せずにずっと顔を真っ赤にして正座をして見守っていた。

「ムンバイ出発して、すぐナグプール行こう!」

そこから先は、慌てて荷物をまとめ、ホテルを飛び出し、文字通り電車で駆け込み、深夜特急でナグプールに向かった。



マンセル遺跡にて高橋淨休(右)を撮影する

小生 小野龍光

オマエもボウズになれ!

縁というものは、本当にあるのだろう。

ナグプールに到着した我々は、すぐさま佐々井上人のいらつしやるインドラ寺に向かった。インドラ寺の階段を登り、ドアも開けっ放しの部屋を恐る恐る覗くと、そこに佐々井上人ご本人が、お一人でいらつしやるではないか!

佐々井上人の本を読んで「とんでもない偉人じゃないか!」と感じていた私には、ただ一人お部屋に座りながら、何者でも無い我々をオープンに迎え入れる佐々井上人の懐の深さに、感銘を通り越して、ただただ言葉にならない感動を覚えた。

コロナが明けたばかりで日本人が少なかったということもあってか、ナグプールでの4日間、ほぼ毎日、時には1日中、佐々井上人の近くでお話を伺う機会を頂くことができた。

ろくすっぽば仏教の知識も無い我々に対してにも関わらず、時に「オマエ、本当になにも分かっていないな!」とお叱り頂きながらも、何時間にも渡つて貴重なお話を聞かせて頂く。

そのお話の中で、唐突に衝撃的な御言葉が飛んできた。

「小野君も、坊さんになるんだ!」

(え!?)

「3週間後、大改宗祭がある。このあとインドの北の方を回って、大改宗祭に、ナグプールに帰ってこい。そこで、オマエも得度するんだ」

(ダイカイシュウ? あ! たくさんの人が仏教徒になるイベント?!)

「そこで得度もできる。そこでお前も坊さんになるんだ。衣も、名前もやる。衣を着て、日本に帰るんだ」

これまでも、佐々井さんがここを訪れた多くの方に「坊さんになれ」と言われていたのかも知れない、と理解している。

でも、私はこれまで資本主義にどっぷり浸かり、これからの生き方に悩んでいたタイミングであった。そんな時に、佐々井さんの存在を知り、そして、実際にお話を聞きながらも「ああ、このような生き様こそ、本来自分がえらぶべき道なのでは」と感じていた私には、佐々井さんからの御言葉が、自分の「運命」の矢としてココロにぶつ刺さっていく。

しかも、佐々井さんの本の中で出てきた「大改宗祭」なる年に一度の大切な式典が、偶然にも、もうすぐ行われるのだという。これが「縁」でなくって、なんなのだというのだ。

「わかりました！必ず、大改宗祭に、ナグプールへ戻ってきます！」  
そして我々は、一度、ナグプールを離れた。北インドを周り、ダラムサラで、まだ10歳前後の尼僧たちが真剣に修行に取り組む姿を見て、ますます、自身の「発心」が生まれてくる。

「発心(ほっしん)」という言葉すら、佐々井さんに教えて頂くまで知らなかったし、もちろん、その時はまだ同じ発心の「ほっしん(法身)」の存在など、知る由もなかったのだが(汗)。

とはいえ、その北インドの旅の2週間、「本当に得度すべきなのか」「得度して、何が変わるのだろうか」「何者でもない自分が、2000年以上も続く教えの歴史に加わるなどしてもよいのだろうか」といった様々な逡巡を経ながらも、再び、10月3日からの大改宗祭のため、ナグプールに戻ってきた時には、不思議と何の迷いもなく、ただただ、穏やかなキモチで佐々井上人の許、得度、授戒をさせて頂くに至った。

奇しくも、出家したての高橋に「(髪を伸ばそうとせせずに)ちゃんとアタマ剃り続けろよ!」と私が寄進したバリカンで、自分自身の剃髪をすることになるとは、思いもよらなかったのだが(笑)。

佐々井上人は、剃り上がった頭に頂いたばかりの衣で身を包む私をまっすぐ見つめて、しばしの沈黙のあと、こう仰った。

「名前を…『りゅうこう』という。龍に、光。龍光。ヒンディー語で、Naga Prakash。衣を着て、日本に帰り行脚しろ」

こうして僧名と御言葉を頂き、帰国して1ヶ月ほどではあるものの、座学で仏教を学びつつ、全国各地、衣を着て、様々な人に会いにうかがい、少しずつ、学びながら、佐々井上人が実践されてらっしゃるように、「目の前で困っている方にできることを行っていく」生活を始めている。

これからの私

以上が、私が得度に至った経緯となります。年内に私は再度ナグプールを訪れ、佐々井上人に学ぶ機会も作ったり、日本各地や、世界の様々な地域を行脚して、そこで起きている事を体験し、そこで暮らす人々と出会い、自分なりにお役にたてることを探し、実践していく。

そんな半生を生きていこうと思います。

短い時間しかお側で学ばせて頂いておりませんが、そこで頂いた恩、そこに至るまでの様々な方の恩を大事に、ひとつずつ、恩返しとなるような行動で、これからの時間を積み重ねていきたいと存じます。

あらためて、佐々井上人とのつながりを実現いただいた、南天会のみなさま、そして、これまで佐々井上人を支えていらっしゃる多くの方々に感謝を申し上げます。

小野龍光 拝

※我々の旅の様子にご興味ある方は「JQ出家して世界に行く」で検索して頂くと、たくさん動画をご覧頂けます。できるだけ若い方にも届けたいと、動画ではノリの軽い言葉遣いをしておりますし、仏教の知識もほとんどありません。そのため、佐々井上人と接する我々の言動に、失礼と感ずる方もいらっしゃるかもしれません。ただ、我々としては、純粋に佐々井さんの活動やお人柄を尊敬し、その魅力と偉業を、我々の表現にて少しでも世に広められればという想いで創った動画です。温かい目でご覧いただけますと幸いです。



Youtube チャンネル  
「JQ 出家して世界に行く」  
はこちらからご覧になれます

# 佐々井秀嶺保存資料 デジタルアーカイブ化プロジェクト

B・R・アンバードカル及びエンゲージド・ブディズム研究会（BRA研）と南天会佐々井秀嶺資料室が共同で取り組む佐々井上人関係資料のデジタルアーカイブ化プロジェクトは、8月18、19日倉敷・京都、9月2、3日茨城、11月4、5日京都・神戸にて、資料整理、撮影作業を行いました。

今回インドから移送した資料に加え、南天会賛同人である神戸・明泉寺の富士玄峰師所蔵の資料を引き継いで管理させていただくことになりました。富士師は佐々井上人インド活動初期にナグプールを訪れて交流を深められ、神戸青年仏教徒会やナグプール同友会を主導して活動支援を続けてこられました。その間にやり取りした手紙や論文、写真、交流記録、日本およびインドでの佐々井上人報道資料など、大部でしかも大変貴重な資料を保存管理され、すでにご自身による文字起こし、翻訳にも着手され、一部はインターネット上にアーカイブされています。さらに西村馨氏と共に収集されたインド発行のアンバードカル博士関係書籍印刷物のコレクション（一部は龍谷大学南アジア研究センターに寄贈）、富士師がインド現地で取材された録音資料・映像資料、日本人支援者支援団体発行の機関紙など、50年佐々井上人支援の集大成ともいべき貴重な資料をお預かりしました。本プロジェクトの実行実現を期待され、メンバー一同重責を感じています。

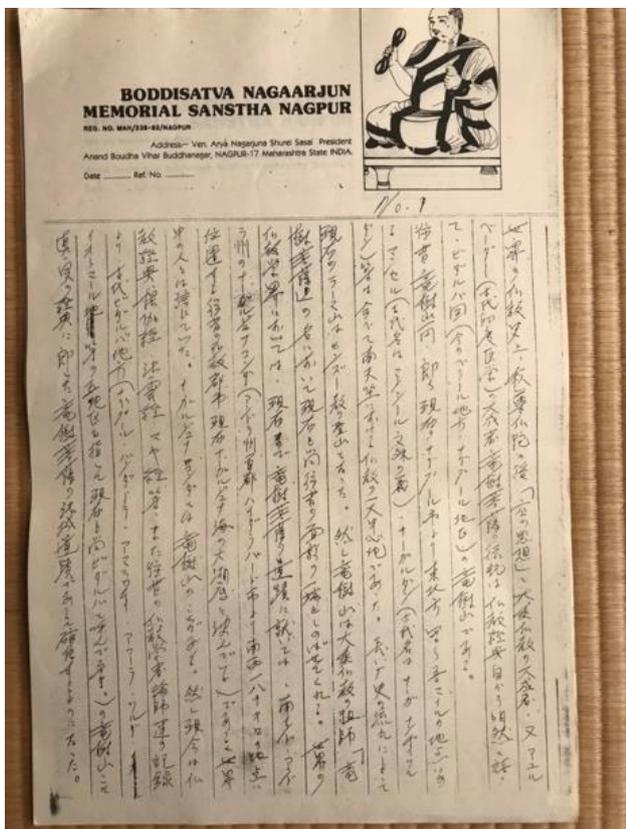
※

現在プロジェクトでは資料の整理、撮影デジタル化作業、閲覧ウェブサイトの作成を進めています。同時に手記や論文等の解読文字起こし作業にも着手しています。ただ佐々井上人の筆記資料は手紙文なども含めて膨大であり、また独特の筆記体は解読に時間を要し、現状は遅々として進まず巨大な山塊の一角にとりついた感じです。

そんな中ではありますが、佐々井上人の記録の一端をご紹介したいと思います。以下の文章は、1997年にラームテク地区竜樹山の麓にマハーラシトラ州政府が「カーリダーサ記念サンスクリット大学」を建設するという情報を得て、その建設に反対するために現地の歴史的因縁や仏教徒の立場を表明した抗議文を、日本の支援者にも経緯が分かるように追記して各支援者に送付した文章になります。

※基本的には原文の表現をそのまま採用し、一部明らかな誤字脱字等は修正を加えています。

(書き起こし編集 佐伯隆快)



佐々井秀嶺記  
竜樹菩薩の大法城



# 大乗仏教の大成者 八宗の御祖師 竜樹菩薩の大法城 一巻

沙門 秀嶺 記

世界の仏教史上、釈尊仏陀の後「空の思想」と大乗仏教の大成者、またアユルベーター（古代印度医学）の大成者竜樹菩薩の法城は、仏教經典自から明然と語るように、ビダルバ国（今のペラル地方、ナグプール地区）の竜樹山である。

往昔竜樹山一円、即ち現在のナグプール市より東北方四〇〇〜五〇マイルの地点にあるマンセル（古代名はマンシール 文殊の義）、ナーガルダン（古代名はナーガナンディワルダン）等は全て南天竺における仏教の一大中心地であった。長い歴史の流れによって現在のラーマ山はヒンズー教の聖山となった。然し竜樹山は大乗仏教の祖師「竜樹菩薩」の名において現在も尚往昔の面影の一端をしのばせてくれる。世界の仏教学界においては、現在まで竜樹菩薩の遺蹟に就いては、南インド・アンドラ州のナーガルジュナコンダ（アンドラ州首都ハイダラバード市より南西一八〇キロの地点に位置する往昔の仏教都市 現地ナーガルジュナ海の大湖底に沈んでいる）であると世界中の人々は信じていた。ナーガルジュナコンダとは竜樹山のことである。然し現今は仏教經典楞伽經・大雲經・マヤ經等、また往昔の仏教学者論師達の記録より、古代ビダルバ地方（ナグプール・バンダーラ・アマラワティ・アコーラ・イオトマール等の五地区を指して現在も尚ビダルバと呼んで居る。）の竜樹山こそ真実の經典に即した竜樹菩薩の法城遺蹟であると確信するようになった。V・P・メラシー博士、コルター博士、ジャイスワール博士等々二十世紀印度歴史学の最高峰にあつて偉大なこうけんを成した大学者達もそれを確証づけ著作している。

「空思想」の哲理の教学を樹立した竜樹菩薩、印度古代医学の創立者竜樹菩薩、印度古代化学の祖竜樹菩薩、南天鉄塔を開頭した真言密教の祖竜樹菩薩等々全て全印度仏教文化各部門の発祥者、大乗仏教の大成者また八宗の御祖師といわれる竜樹菩薩のことを指している。是等は皆唯一人の竜樹菩薩に帰結せしめて観見している。

八世紀に出世し、仏教と相対したバラモン教印度教等バラモン思想至上主義をかざして中興の大祖といわれる初代シャンカラチャリヤ大阿闍梨も本来此の竜樹菩薩の「空思想」相承した人で、此の竜樹菩薩の空思想を幻影思想（マーヤ思想）といって彼独自の思想を樹立してこれをバラモン教の中かく思想とした。）に置きかへて八世紀以降ヒンズー教の全盛復興をなしてゆく「ペーダインタ哲学」の宗教思想を大成したものである。

竜樹菩薩を釈尊仏陀につぐ大聖菩薩と尊崇し、自国自宗の御祖師とする国々にチベット、

中国、モンゴリア、カンコク、タイワン、日本等がある。此のように全世界において仏教哲学最高の人と尊崇される竜樹菩薩の最勝の歴史的法城遺蹟に、此の度、マハラシュトラ州政府は印度教梵語大学（くわしくは「カウイー カリダーサー スムルティ サンスクリット大学」）を億単位のぼう大な予算資金と三〇〇エーカーの広大用地をもって建設することを州会議において決定したのである。その後建設用地の決定において州政府としてはその選たぐにおいて極秘的に此の竜樹山山ろく一円を決定予定しているときく。

此の故に仏教徒民衆および印度文化と真実なる歴史を守護せんとする全ての宗教の人達は、此の州政府の決定に対して強力なる反対運動を起こすであろう。政府の土地は竜樹連峰、此の竜樹山と相並ぶラーマギリ山の週辺に多くの広大な土地を有している。それを二十世紀仏教の再興をだんあつするか如く、こともあろうに選んで世界の偉大な太陽竜樹菩薩の最勝無比の法城遺蹟、ビダルバ国南天竜宮城竜樹山を、ヒンズー教徒と仏教徒の決戦修羅場に化さしめ竜樹山を破壊し永遠にヒンズー教の聖地にせんとするいんぼう計画であり、じゅんすいのプラマン思想に立脚する梵語大学を此の竜樹菩薩の遺蹟法城仏教の遺蹟に建設せんとするじゅんびをマハラシュトラ州政府は着々とすすめている。故に此の様な州政府の方針計画に対して仏教徒民衆は強力な反対運動のたいせいをしきその闘争行動に出るであろう。

仏教の開祖釈迦牟尼仏が成道成仏したあの仏陀ガヤ大菩提寺のだっかん大闘争運動の如く、竜樹菩薩の全世界に於いて唯一無二の遺蹟法城を守護する決戦を展開すべき義務と使命は全印度仏教徒、またひいて強く云へば全世界仏教徒の必須の本来の使命ではなからうか。

竜樹菩薩は第二の釈迦仏といわれ、前世法雲自在王如来といひ大乗仏教の創立者大成者ともいわれる。又竜樹菩薩は三国仏教史においては八宗の御祖師といわれ、三国仏教のいかなる宗派も此の竜樹菩薩の思想と著作に於いて、各宗の祖師達は各々自宗派の教相判釈を開頭樹立して立教開宗を成し遂げている。又古代印度医学化学は中国医学と相並んで世界に比類なき最高すいじゅんを顕示しているものであるが、その古代印度医学又化学の体系的創立者大成者とも竜樹菩薩はその原典に明然と明記されている。

此のように全アジアはもちろん全世界に偉大な文化宗教の思想影響を興へ、その思想行動の足跡を残している竜樹菩薩の南天竜宮城竜樹山の法城遺蹟、今その法城を永遠に地上より破壊隠没せんとする非常の時、今我々は立ちあがりそれを守護せんとするにあたって例へ生命をおとすとも更々悔いはない。

私自身の見解をいへば州政府をして南天竜宮城ナグプールに梵語大学を建設することにおいて何も反対する理由はない。他の地区の政府の広大な土地を利用して建設すれば良い。

然しこと選んで仏教の最高思想家である竜樹菩薩の法城、即ち仏教徒の聖域遺蹟周辺にその建設用地を選たくしたと云うことにおいて我々は反対闘争をおこさなければならぬのである。

又その建設せんとする梵語大学の正確なる名称は「カウイ・カリダーサ記念梵語大学」と書く。此の大学名のカリダーサと云う往昔の大文豪の名においても反対するの理由は十分にあり。ましてカリダーサを記念した大学となると尚更である。

想いおこせば約二十年前、往昔竜樹連峰の頂峰に、時のマハラシュトラ州首相ヤシヨントラナイク氏は州会議にかけて竜樹連峰ラーマ山の一峰頂上に古代印度が現在も尚世界に誇る唯一の大文豪カリダーサの大記念塔を建立することを決定した。

それはナグプール市のバラモン出身で此の二十世紀全印度歴史学界に於いて最高の地位に有り幾つもの大学の学長又教授をつとめビダルバ学研究所の会長をつとめ国際的学者であったV・P・メラシー博士が一生涯に亘って全印度の歴史学者達のもうれつな反対を押し切つて自己の主張学説を何時も曲げずつらぬき通した歴史的大問題は、此の印度不滅の大文豪カリダーサの竜樹連峰ラーマ山在住の問題であった。

則ち彼メラシー博士の見解は三々四世紀に出世した大文豪カリダーサは生涯に多くの著作をなして居りそれはいづれも世界的に有名となり世界よりも最高の評価をうけている。そうしたカリダーサの多くの著作の中に特に一躍光つている著書は「雲よりの使者」(メグドゥー)で有る。此の大文豪の一大代表作「雲よりの使者」は若きカリダーサをして此の竜樹連峰ラーマ山に住持して書きあげたものであるとする。然し他の全印度の歴史学者達は此のメラシー博士の主張に反対して居るが、彼等多くの学者自身にも未だ明確な学説を打ち出すまでは到っていない。多くの有名な歴史学者たちは此のメラシー博士の学説を倒さんとしてかかんなる反対論説をあげたが、彼メラシー博士はそれ等の多くの反対学説をもまた打ち破つて一生涯その学説主張を曲げなかった。こうした博士の不動不退の主義学説を真説としたマハラシュトラ州政府は、往昔竜樹菩薩の大法城で有つたとされる竜樹連峰ラーマ山の頂峰に、当時二十世紀印度仏教復興の大業を成し遂げ尚且つ前進しつづける南天竜宮城仏教徒のもうれつたる反対の声も耳に入らず遂にカリダーサの大記念塔を建立したので有つた。

而してカリダーサと云う三々四世紀に出世した大文豪は印度歴史最大の作家であったが徹底の印度教奉信のバラモン思想に徹した人で、仏教にとつては法敵以上の存在であったことは、それは彼の竜樹連峰ラーマギリ著作の「雲よりの使者」の中にも明然と見へる。「雲よりの使者」には大乘仏教十大論師の一人陳那菩薩(ディグナーガ)を激しく批判非難している。

陳那菩薩は仏教思想に立脚した因明論を開頭した人として仏教史に不滅の地位をきざっている。今日陳那菩薩は竜樹菩薩の空思想の哲理と同じく「因明論」を著し、西紀三々四世紀著作された陳那菩薩の因明論は現在も尚洋の東西の因明学学者の最勝無比の根本經典よりどころとなつている。此のような大論師大菩薩を竜樹連峰ラーマ山に住持して著作した彼の代表作「雲よりの使者」の中に批判非難していることは、彼カリダーサと云う人をして仏教、ことに竜樹連峰を根本道場として栄へた竜樹菩薩の開頭樹立せし大乘仏教の非常なる反対者であり、それはすでに反対者のいきを越へて法敵で有り法城破壊の主導者であつた様にも思へる。

南天竜宮城は西紀前後頃よりサートワハナ王朝の支配下に有り、その王朝時代に大乘仏教は出世し竜樹菩薩はくんだりんしている。サートワハナ王朝滅亡後、即ち西紀二世紀半頃ワカタカ王朝がだいたいとして来南天竺の大王となつた。而して此のワカタカ王朝の主都は竜樹連峰の正面約五キロの地点に現在ナーガルダンと云う村にその往昔の城と当時の面影をかすかながらも残している。

此のワカタカ王朝の主都、現在のナーガルダンより仏像等が多く発掘され、「ナグプール・ナーガ・ナンデイワルダン」と云う碑文も発見され往昔この地域は竜樹連峰の本拠で有つたことを物語っている。ワカタカ王朝も竜樹連峰の王朝であり、従つて王朝初期頃は仏教を奉信守護する王朝であつた。アジャヤンタ、エローラー等の仏教どうくつの作成建立の記録碑文に此のワカタカ王朝の人達の名前も残つて居りそれを良く証明している。世紀の大文豪カリダーサは中天竺北天竺一円を支配していたグプタ王朝最大の英主チャンドラグプタ大王に信頼された人で、此のチャンドラグプタ大王の王女ブラバワチグプタを南天竺統一の国主ワカタカ大王にとつがせ、その後見役に此のカリダーサが南天竺に派遣されワカタカ王朝を見守りかんとかくする大任をしている。このことは現在の印度歴史学者も認めているところである。然ればこうみてくるとカリダーサと云う人は単なる大文豪の天才的才能にたけていたのみではなく時の全印度をも支配しかねないグプタ王朝の英主チャンドラグプタ大王に信頼されワカタカ王朝の北進を防止するべく後見かんとかくの大任をおびたことは政治的手腕にも天才的天分をもつた人であつたことが判る。政治的後見役かんとかくと云うことは彼カリダーサをしていんぼう、さくりやく計画等自由自在にあやつり得た人であることである。チャンドラグプタ大王の片うでとして南天竺大王ワカタカ王朝の後見役・総かんとかくとして南天竺竜宮城主都ナグプール・ナーガ・ナンデイワルダンに入室したとする学説は多くの学者も一致している。然ればワカタカ王朝の総かんとかくとして必然的に印度教最大の法敵とみなされた南天竜宮城の一大法城・竜樹連峰の聖域を破壊隠没せしめ印度教の大聖地にせんとする

法戦の野望は仏教を法敵として観ていた野望いんぼうかんさくにたけた彼カリダーサには当然至難のことではなく後見役と云う地位より容易なことで有った。

本来仏教奉信の竜王朝の血統をつぐワカタカ王朝もこうした人達によって随次印度教化され仏教をすててゆくけいこうになってゆきシバ神信仰のワカタカ王朝へと変かくされてゆく。

世紀の大文豪にして政治的天分豊かなカリダーサをしてワカタカ王朝竜種族の帰依する大乘仏教の一大法城竜樹連峰一円の聖域はほとんど跡かたなく大破壊の打げきをこうむって荒はいし山に帰ってしまった。竜種族のワカタカ王朝も随次骨抜きにされ、ざん時ヒンズー教王朝になってゆく。往昔竜種王如来こと文殊師利菩薩の法城マンシール・ナガルダン・竜樹連峰は八世紀のシャンカラチャリヤのバラモン思想復興ヒンズー教全盛の影響に支配され、またまた重ねてマンセル・ナガルダン・竜樹連峰の法城は徹底的な大破壊によって大打げきを受け無惨にも荒はいの域に達するが、それ以前すでに根本的に一大佛教の大法城破壊隠没荒はい更にはヒンズー教聖地への変様とその印度教法城建設への変格的法道を開いてゆくのは上記の如く三々四世紀のワカタカ王朝時代中北天竺の支配者チャンドラグプタ大王の王女ブラバワチグプタのワカタカ王朝へ略結婚としてとついで来た時グプタ大王の指令においてカリダーサが後見見張り役亦ワカタカ王朝かん視かんとの大任をもって南天竺竜宮城へふ任してきた時点においてさしも一大隆盛を保った文殊・竜樹両大聖菩薩の一大大乘仏教の最拠点、南天竜宮城竜樹連峰一円はほとんど破壊されていたと観ることは、カリダーサの一方の世紀的文学的天才によって、竜樹山連峰に坐しワカタカ王朝をかんとくけん視しつつ書きつづった「雲よりの使者」の中に前記の如く、仏教の大学者にして仏教の因明学と云うより印度の因明学論を大成し二十世紀の現在も尚その因明学論の真価は全世界論理学の始・中・終に亘る最高のよりどころとなつている陳那菩薩ディグナーガ大論師に対して激しい批判非難をあげていることを見ても十分うなずけるものだ。

彼カリダーサの見事な政治的いんぼうさく略の手わんは、今自身の坐している南天竜宮城竜樹山の山容は竜身形である。その竜身形竜樹連峰の最要かなめは竜頭部に相当るところ、即ち全山岩山岩城の如く見へるところにて玄奘三蔵法師をして西域記に竜樹菩薩の法城を全山岩山城の如く見へると記している全くその如く法城で、往昔は確か竜樹法城の最大重要部のところであつたらうが二十世紀の現在ではラーマギリ山、即ちラーマヤーナの主人公ラーマ王子の聖地山として知られている。

そして全印度教徒の南天竜宮城ヒダルバ州域における印度教最勝の大聖地に変ぼうしている。往昔竜樹菩薩連峰の中最大重要部に相当する竜頭部竜樹の法城がラーマの大聖地になるま

では、即ち—全印度の印度教徒をヒダルバ国南天竜宮城竜樹連峰ラーマ山への信仰にかりたて向わしめる為にひとつの印度神話を真実的歴史物語りとしたストーリーをつくらなければならなかった。

則ち、ラーマ王子は父王より十四年間山林放浪の命を受けて妻のシーターと弟のラクシュマン王子を連れて三人で十四年間の山林生活の旅に出た。然しある日、ラーマ王子兄弟は山林のかりりように出た中、愛するシーターを羅刹王ラーワンに連れ去られてしまった。ラーワンはランカー国ランカー城の大王で羅刹であった。ラーマ王子兄弟はシーターをたずね求めて連日連夜山林を放浪した。その放浪の途路此の山にしばらく止まったのでラーマの山と此の山名をつけた。ラーマは印度教の最高神ビシュヌ神の化身で有りその本地身は神で有る。そのラーマ神の止住せし聖なる山ラーマギリ山と云うことに於いて此の竜樹連峰は大乘仏教の面影は全く消へ絶へて、変わって印度教の絶対聖地として全印度の印度教徒より信仰されている山で有る。

然しこれもまた本来のラーマヤーナ物語りにはひとつも出てこないところで、その本来の物語りもないか空のラーマ王子の放浪行程つくりあげ、此の竜樹菩薩の大乘仏教の大法城を破壊してラーマの聖なる山として竜樹連峰の一切を容容変名せしめてしまったのである。

竜樹菩薩は只単なる大哲学者大論師、また只単なる大乘仏教の大成者、八宗の御祖師としてのみ認識すべきではなく、釈尊の化身としての天才的天能的大宗教家で有り大菩薩であり大慈悲者である。大乘仏教の最勝なる多くの經典は無名の天才がつくりあげたと仏教学者は云うが、無名の天才家とは誰人ぞ！かかる無量甚深微妙の大乘仏教の諸經典がそうかんたんに無名の天才家がつくりあげたものとして片付けることが出来るかどうか、否！その無名の天才とは大宗教家前生法雲自在王如来竜樹大聖を除いて他にはあり得ない。事実世紀の多くの有名な歴史学者又宗教学者は大乘の甚深秘密の大経は竜樹菩薩御自身の創作であると主張して居り私もこれに同感である。

竜樹菩薩は伝記によれば六百才あるいは八百才の高齢を保ったとされて居り、チベット伝などでは自身で首を切り一度死するともその首はまたもとどおりに体につき再生したと伝へている。故に竜樹伝は只伝説の人、か空の人とする人々もいるがしよせん人間の頭では考えられないマカ不可思議なる大宗教家で有る。然し此の竜樹菩薩の御伝記は真実神祕の伝記として私は感得する。故にこそ三十三年前私の前に竜樹菩薩御応願し、汝速やかに南天竜宮城へゆけ、南天竜宮城は我が法城也云々との御言葉をたまわり、その菩薩御招かんに応じて私は此の往昔竜種族の主都南天竜宮城ナグプールに入り来たるもの、竜樹菩薩の御生命未だ

南天竜宮城に在る。

竜樹連峰は往昔竜樹菩薩の開山にて大乘仏教の根拠地でありその全山山容は竜身形で有る。私は古長老よりきいてゐる。古代の仙人、牟尼、高僧、名僧は時として永遠の生命をつなぐ。これ人間身は五元素又六元素に還るともその霊身は竜身となりて永遠の生命と永遠の大業をなしてゆく。

然れば竜樹菩薩の御霊身は竜身となりて何時も南天竜宮城竜樹連峰に常在常住する。不思議なるかな、時として私の眼前に白蛇白竜の大身を窺ふことが有り。時として私のうつる写真の中に白竜の大身が現出している。その現出した白竜の写真は一度ならず二度三度とある。その竜頭は私の眼前に且つて応現した全総白はつの顔面と同じく総白はつにお、われし竜頭なり。全身は白雲の如く白銀の如く輝いている。又その竜頭は竜樹連峰の竜頭山と同じき形容まさにおどろくばかりである。又その白雲の如くの白竜身はまさに竜樹連峰の竜身形と同一なり。これまたおどろくことである。然れば竜樹連峰こそ永遠の生命と永遠の法道をたれて止まない竜樹菩薩の一身と想われる。例へ現在には往昔大乘仏教の根拠地竜樹連峰の面影なく、印度教ラーマ神の全印度にきこへたる大聖地にかわつてゐるとも、その竜樹菩薩の永遠の生命は白竜身と同じ竜樹連峰の山容を一切の人々に拝さしている。大乘仏教の大法城は破壊隠没して印度教の大聖地となつても、菩薩は無念の涙を流しつつも時の来るのを待つてゐる。私の前その真身白竜の竜樹菩薩身を御応現させて南天竜宮城に私を招かんした。竜樹菩薩は私にその真身を觀せ、その御声をきかした。又竜樹菩薩は私に永遠生命と云う靈性白蛇竜身を現出せしめた。私は此の竜樹菩薩の大慈悲心に報わねばならない。菩薩の大法城を一身守護せしめねばその南天竜宮城付属の証明は成り立つまい。竜樹菩薩は私に法の付属と法城の守護を付属せしめんが故に御応現しその真身を拝させて下された。私は選ばれたる者、南天竜宮城の大地をつぐもの、竜樹連峰を守護するものとして選ばれたのだ。

現在竜樹連峰印度教ラーマ神の大聖地として全印度に名をはせてゐるが、その全山竜身形の山容の中に「尾部」に相当する一山が「竜樹山」としてわずかに竜樹菩薩の御名をとどめてゐるにすぎない。それもその竜樹山の中腹にある竜樹寺も今は印度教の寺となつてゐる。竜樹連峰の最尾部にわずかに竜樹山の名をとどめ往昔竜樹の大法城の一抹の面影をしのばせてくれる。そも蛇身にせよ、竜身にせよ、その生命力の最後までのごころと、その生命力の一番強きところは竜蛇身の頭部に非らず腹部に非らずしてその最尾部である。例へ竜頭部蛇頭部は粉々になるとも尾部のみは粉々にされても動き息づいてゐる。

三々四世紀カリダーサによつて大乘仏教の大成者南天竜宮城竜樹連峰竜樹菩薩の大法城は

破壊隠没され更に八世紀シャンカラチャリヤの出世によつて大乘仏教の法城、ことに竜樹菩薩の南天竜宮城の法城は大だげきを受け一切が破壊隠没し、變つて印度教ラーマ神の大聖地として顔をのぞかせ随次全印度にその聖山の名と信仰はひろがり、南天竜宮城におけるヒンズー教の最大メッカになつたのである。然し竜樹菩薩は白竜身として永遠の霊生命を南天竜宮城乃至竜樹連峰にとどめ竜身形の連峰の「最尾部」に最後の竜樹菩薩の竜樹山にとどめ竜頭部は粉々に破壊されても此の連峰竜身形の最尾部は竜樹山としてかすかに息づいて、白竜身となつて竜樹菩薩は生きながらへてゐる。法城を破壊されたものの無念の涙を流しつつ応現招かんせし者選び大地をつぐ者への私の活動に一切を付属して、時を待つてゐる。

然し「聖なるラーマ山」(ラーマギリマハットマ)と云う印度教ラーマ神信仰の立場に立つて何者かが書いた古書には、竜樹菩薩の大法城は現在の如くその最尾部の一山のみをもつて竜樹山とするものではなく竜身形をした竜樹連峰全域に亘つてゐることを見事に書き出している。事実それを証明するかの如く印度考古局発掘部又各大学考古学研究発掘部は数回に亘つて発掘してゐる。然し竜樹連峰のいづこを発掘しても仏教遺蹟また仏菩薩像等のみが発掘され、事の重大さを認識恐れて発掘は中止せざるを得なくなつてゐる。故に右の古書の竜樹連峰全体が竜樹山であり一大大乘仏教の最たる大法城で有つたことが理解できる。此の古書はヒンズー教ラーマ神信仰の立場より連峰が聖なる御山であるところより印度教的方面より書かれてゐるが、それにしても大きなミステークをしたものだ。ヒンズー教徒によつて此の竜樹連峰の大法城は破壊隠没されたことを此の古書は如実に証明してゐるようなものだ。二十世紀印度に仏教が再興される時、だいたうする仏教徒に此の古書がよまれるのを恐れて、それと時を同じくして此の古書は一切隠没没収されて現在入手はほとんど不可能である。

今マハラシュトラ州政府は、この南天竜宮城竜樹連峰の大乘仏教一大法城を破壊し、仏教因明学で現代世界的大乘の大論師といわれる陳那菩薩批判した南天竜宮城竜樹連峰法城の最大の法敵古代印度世界的大文豪にして無二の政治手わんを持つてワカタカ王朝を押へたカリダーサの名において、竜樹山と云う唯一竜樹連峰最尾部の一山にその名をとどめる法城遺蹟一円の破壊隠没の挙に出でることは断じてゆるせない。竜樹菩薩の御霊(レイ)性(ショウ)白竜身となつて往昔法城破壊のくつじよくをかみしめ無念の涙を流して我を招かんした。

我々はカリダーサの記念において此の竜樹山一円に梵語大学建設の為にその聖域一円の土地を政治権力をもつて強制的没収の暴挙に出でるその州政府の方針といんぼう計画を前に断じて反対大闘争を展開し、往昔の竜樹菩薩のくつじよく、また二十年前の竜樹連峰々上カリ

ダース記念塔建立の無念の涙、くつじよくの涙をかみしめて、またしてもだんあつ破壊の拳に出でた此のカリダーサ梵語大学建設には断じて反対しなければならぬ。これ我をして、竜樹山一円を破壊しても尚土地強制没収の暴挙に出でて大文豪カリダーサ記念梵語大学建設に反対し大闘争運動を全マハラシュトラ州乃至ひいては全インドに展開せんとする理由である。

また現在、竜樹連峰竜樹山々々には長年間のしん苦をかけて約二十エーカーの土地を法規に順じて取得した「竜樹菩薩記念協会」(会長・アーリヤ・ナーガルジュナ・シュウレイ・ササイ)をしてブルドーザー、トラクターを使い山ろくを開こんかいたくして「国際竜樹菩薩アーユルバーダー(古代印度薬草木医学)研究総本部」を創設し、永遠に此の地域遺蹟を印度最高の、何千種の全世界各国々よりの薬草木をとりよせてさいばいすることに於いて全世界における古代医学界にこうけんすると共に、此の竜樹連峰竜樹山一円を美しい竜樹菩薩アーユルバーダー公園にせんとして努力しているところである。竜樹山には現在も尚竜樹菩薩の足跡をとどめ残しているかのように三〇〇〇四〇〇種位の薬草木が存在する。他のいずの地にも此のようなところはない。

故に我々は州政府に通告する。私達は州政府の決定による南天竜宮城ナグプール地区に州立梵語大学を建設することに反対はしない。然し往昔より現代にかけての仏教の遺蹟法城を、然も往昔の大菩薩竜樹の法城を破壊隠没してまでも此の地に梵語大学を建設することには反対する。もっと良い他の土地を選びそこにゆう美な一大梵語大学を建設して欲しい。

重ねて通告する。印度の文化、宗教、哲学、化学等々において永遠不滅の大金塔として輝やくインドの太陽竜樹菩薩の法城遺蹟に政府の権力をもって遺蹟法城の永遠的破壊と、二十世紀復興成った仏教復興へのだんあつ意識意図いんぼうをもって、此の聖なる法城を地上より永遠に抹消隠没せしむる強制的用地没収の行動手段に出た場合は、我々全印度仏教徒は生命をかけても州政府と対決して此の菩薩の且つての大法城を守り抜くと云う闘争行動対決行動に出るのである。

古代印度歴史と仏教史を証明として、現代二十世紀復興成った全印度仏教徒仏教徒、否！各宗教を問わず全印度民族の前に、文・理・現の三証を不二とせしめて置き、此の印度歴史と仏教史と竜樹菩薩の大業を觀る。然れば二十世紀印度仏教復興を双けんになつて印度の大地を仏国土浄土とせんとする八千万仏教徒民衆、更には二十世紀印度不世出平和建設の旗手、印度平和憲法の起草者たるアムドカル博士の思想・行動に於いて此の印度の大地より階級制度、種姓制度、不可触民制度等をいつそうして、自由と平等、人權の尊重と独立、信仰の自由と平等等の社会国家を建設せんとする、もつて印度大地の平和と繁栄、幸福と和合の大地

にせしめんとする、これ又此の志をつぐ人々、現代においては又何千万人、斯かる印度愛国の志士達、仏教地湧の菩薩達等をして、只黙して此の竜樹菩薩法城の破壊隠没を黙って觀ているはずは有り得ない。必ずや斯かる民衆何十万何千万何億と全印度團結大闘の行動に出で此の竜樹山の法城を守り抜くことを決意している。

私は今の時点に於いて南天竜宮城竜樹連峰の大部分をしめる「ラーマ山」のことに就いて語ることはさげたい。然し出来得ることなれば竜樹菩薩の法城と云う古代印度大乘仏教発祥の大法城を現在印度最右翼民族主義に立脚する政府政治の支配権力を行使して永遠に地上より隠没破壊せしめんとするいんぼう意図のもとに印度教の梵語大学又往昔竜樹連峰竜樹の大法城を破壊しラーマの大聖地へと民衆の信仰運動を指導し南天竺の竜王朝を押へた希代の野望的政治家にして世界的大文豪カリダーサの名において記念梵語大学建設と云うヒンズー教聖地へ変かくせん行動に出る時は、乃至また我々の斯かる真劍無比の二度三度と重なる非常通告を無しに竜樹山一円の法城地を強制没収の行動に出る時は、上記「ラーマ山」の歴史に就いて、即ち往昔大乘仏教の大成者竜樹菩薩の大法城南天竜宮城竜宮大塔竜樹連峰の隠没破壊の歴史に就いて追及し、その竜樹大聖一大法城の地上隠没地下沈でんの真実なる歴史を全印度全世界に向つて公開発表せざるを得なくなるであろう。

我々は出来得る限りそのような、往昔の大乘仏教の根拠地竜樹連峰竜樹菩薩の大法城破壊の大事件歴史を公開発表することをさけて印度教徒仏教徒間に生ずる闘争觀を出来ればおん和の内に解決したいと想っている。我々はしので此の南天竜宮城竜樹連峰の一角竜樹山のみでも往昔の竜樹菩薩の御名と共にその法城の遺蹟の地として守護秘蔵してゆければ幸いわいと想っている。故に此の記の半分位の稿を此の度全印度の新聞に発表すると共に他の両教徒間にさしきわりを起すようなところはけいさいをひかへる。然し遠く母国日本の仏教界諸尊師の前にまた同朋法友諸兄諸君に日本仏教八宗の御祖師竜樹菩薩の未だ不可解な永遠のなぞとされている大法城を明かす由縁をもって全稿を母国に送付する。これをもってすべて大聖竜樹菩薩の法城が明確づけられるとは想わないが、こうした法難、迫害、だんあつ起生するその機々々々において今後も益々深く竜樹菩薩の法城遺蹟に就いて必然的必須的に書かざるを得なくなつてくるので、その度事に大聖竜樹の大法城は二十世紀の現在全世界の前に徐々に明るみ出てくるであろう。

一九九七年二月十二日記

南天竺竜宮城沙門

佐々井秀嶺 拜上

印度名 アーリヤ・ナーガルジュナ・シュウレイ・ササイ

(解説)

この文章は、現在に至るまで続いている一連の龍樹山闘争の記録であり、佐々井上人の龍樹菩薩の法城守護への思いが伝わってきます。結局サンスクリット大学(カヴィクワラグル・カーリダーサ・サンスクリット大学)は、龍樹山麓から少し離れたラームテクの市街地に建設されました。龍樹山(ナーガルジュナ・テークデー)の名称が残っている連峰の中峰部一帯について、佐々井上人と龍樹菩薩研究協会は歴史文化遺産認定を求める公益訴訟を提起し、裁判所から「現状の維持」が命じられています。龍樹山の麓の龍樹菩薩記念研究協会所有の土地には、その後2010年に龍樹菩薩大寺が建立され、また現在BAIAEJapanのメンバーが中心となって進めるビッグブッダ・プロジェクトにおいて、教育センターの建設も予定されています。



「竜樹菩薩の大法城」関連地図



龍樹山龍樹寺

# 南天会交流会を開催します

## 岡山 長泉寺

岡山県岡山市北区南方3-10-40

2022年12月24日 土 午後2時〜

## 東京 真成院

東京都新宿区若葉2-7-8

2023年1月14日 土 午後2時〜

予約不要、どなたでも参加できます。

交流会については南天会までお問い合わせください。

- ・2023年度の佐々井上人来日について
- ・南天会活動報告 最近の佐々井上人の活動について
- ・その他、インド渡航相談、佐々井上人への相談など



長泉寺ホームページ



真成院ホームページ



お問い合わせは南天会まで  
南天会メール

### 復活の記念祭 高山龍智

去る10月29日土曜、首都圏某所にて在日インド人仏教徒の非営利団体・B.A.I.A.F.(アンベードカル博士国際教育協会)主催による

66th DHAMMACHAKRA PARIYATAN

(第66回 改宗記念祭)が開かれました。今を去る1956年10月、インド中南部ナグプールで行なわれたヒンドゥー教から仏教への集団大改宗以来、世界中ですつと続けられてきた「解放と自尊の記念祭」ですが、この2年間はコロナ禍の自粛を受け、オンライン開催を主として来ました。日本で暮らす改宗仏教徒たちも当時いち早くこのシステムを導入し、直接参加を配信スタッフのみに限定して、法灯護持に精進して参りました。



2020年オンライン配信の様子

そして今年、4月のインド大使館公式行事『アンベードカル博士生誕祭』に続くかたちで、ついにこの日本でも『改宗記念祭』が復活したのです。今回、総司会を務めたのは小学生男子コンビ。メガネの子が日本語で、相方が英語で、見事に大役を果たしてくれました。



じつはゲームの達人コンビ

中堅メンバーによる仏教讃歌の奉唱。ところで、近年日本でもインド映画の人気によって漸く認識され始めましたが、インド人は「歌って踊って感情を表現する文化」なのです。このことは日本人が古くから親しんだ漢訳の仏教経典にも「偈頌(げじゆ／SONG)」や「歡喜踊躍(かんぎゆやく／DANCE)」と明記されているのです。



歌は『改宗の原点を思い出せ!』

続いて、少女たちによる「踊躍」の披露。古典舞踊をアレンジした子もいれば、キレッキレのポリウッド・ダンスで会場を沸かせた子、ほっこりしたお遊戯で和ませてくれた子…。みんな元気一杯でした。



可憐なアプサラー(妖精)たち

インドからZOOMで参加してくださったのは、アンベードカル博士の曾孫で社会活動家のラージ・ラトナ・アンベードカル氏。佐々井秀嶺上人のもとで得度した僧侶でもある氏は、今年ニューデリーで数千の仏教改宗者を世に送り出しました。



ラージラトナ氏と私(2019年8月)

またこの日、特別ゲスト講師として登壇してくださったのは、来日中の合衆国ミシガン大学准教授…ジョン・ケウン先生。英語にマラーティー語を交えながら、仏教の未来と社会活動の関わりについて講演されました。

式典のクライマックスは、在日インド仏教徒の奥様方三人による創作舞踊。テーマは「空(慧)・空(戒)・空(悲)」。中国や日本に伝わった

——最後に。およそ2年ぶりの再会を喜び合うインド仏教徒たちを見ながら、私は、個人的な感傷に浸っていました。私がインドと関わるようになった動機は、単純素朴なものです。1992年に初めてインドを訪れたのも「お釈迦様の国に行ってみたい」、ただそれだけでした。この時、現地でのコミュニケーションが英語の通じる就学経験者に限られたことで「お釈



三菩薩の舞い

仏教では「戒定慧」の三学…戒律を守って瞑想を保持し悟りの智慧を育む…を説きますが、13世紀初頭にイスラム勢力の侵攻を受けヒンドゥー教に吸収されてしまった歴史を持つ現代インドの仏教では、「まず知性を身につけ(慧)、人道をわきまえ(戒)、隣人愛を実践せよ(悲)」。これを三大徳目に掲げます。



迦様の国の人々と普通の会話がしたい」と、ヒンディー語を覚えました。インド庶民にとっては「神秘と瞑想」より映画が心の支えであること、お釈迦様の国では仏教が「むかし滅びた異端」であること、その仏教が被差別階層出身のアンベードカル博士によって再起動したこと、そして仏教復興運動の指導者が元日本人の佐々井秀嶺上人であること…等、すべてが私の動機に更なる火を付け、今日に到っています。或る日本のお坊さんは言いました。「インドもいけれどねえ、宗派のなかで上手くやっていくのは、ほとんどメリットないでしょ」私の単純素朴な動機は、間違っていない。と、思っています。

(高山龍智上人 Noteより転載)



在日インド仏教徒による団体  
BAIAE



恒例のジャイビーム！

南天会会費・支援金(2022年5月1日~2022年11月30日) **712,400円**

### 【特別支援金寄付者ご芳名】

※上記期間中に年会費以外で支援金をいただいた方のお名前です。

飯田寿一 池田俊昭 伊藤友人 江口泰観 越前拓人 菊池かな 工藤真奈美 窪寺伸浩  
 倉田順子 小池一郎 小島加奈 小西涼瑜 佐伯生子 佐伯隆快 坂田龍晴 穴戸末美  
 白井昌子 鈴木晋介 武田英敬 田口清紹 多田邦洋 多田崇俊 多田磨理子 多田真祥  
 手塚龍天 手塚優子 土岐信子 中川豊俊 成山昌夫 野田豊 福瀬くに子 本多末男  
 松田龍児 水谷浩三 村松由季子 宮崎智和 宮淵泰存 米田義弘 李道道 渡邊晃  
 渡辺典子 (五十音順 敬称略)

その他、世話人・賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

米寿のお祝い 8月30日 佐々井秀嶺上人バースデードネーション2022

**89,492円**

※佐々井上人の誕生日に合わせてシンカブルにてキャンペーンを行いました。

(寄付者) 新井絵理子 新井励 飯田寿一 大堀直樹 菊池かな 小池一郎 小林三旅

佐伯隆快 坂田龍晴 根本達 宮島雅史

(五十音順 敬称略)

※支援金は、佐々井上人の要請に従い順次インドへ送金しております。

8月30日ナグプールにて、高山龍智師に寄託して支援金100万円を佐々井上人にお渡ししました。

※インドへの渡航が通常に戻りつつあります。ナグプールへ行かれる予定の方は、現地へ連絡しますので南天会事務局にご一報ください。

※龍族バックナンバー、関係書籍・DVD頒布いたします。事務局までお問い合わせください。

**あたたかいご支援ありがとうございます**



### 【報告】パウニ大仏修復完成！

龍族19号でお知らせした暴風雨で倒壊したパウニの大仏が修復工事を経てこのほど完成しました。

パウニはアショーカ時代のストゥーパ跡など重要な仏教遺蹟が残されている地区で、それらの遺蹟を守る活動の一環として、地元の仏教徒が寄進して佐々井上人主導の元13メートルの仏立像を建設中でした。しかし2020年4月の暴風雨により倒壊し、頭部が外れるなどの大被害を受けていました。佐々井上人からの要請により、南天会で呼び掛けて修復の為の支援を募り、南天会支援金とともにインドへ送金しました。コロナ禍の中、修復工事が行われ、佐々井上人も何度も現地へ行って監督され、無事黄金のブツダ像が完成しました。佐々井上人より写真が送られてきましたのでご報告いたします。

ご支援いただいた皆様ありがとうございます。

◆南天会現況(令和4年12月1日現在)

正式会員数 215名

龍族発送者 371名

※贈与者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆賛同人(50音順)

漆間宣隆(浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月(釣月庵庵主)

織田隆深(高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

小野重徳(仏国土の会会長)

黒澤雄太(剣士・日本武徳院師範)

小池一郎(株式会社マクシス・シントー常務取締役)

高山龍智(佐々井上人お弟子)

土屋信裕(顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰(臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存(日蓮宗妙光寺住職)

宮本光研(真言宗御室派元執行)

宮本龍勝(佐々井上人お弟子)

山本宗補(フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽に「ご参加ください」。

南天会会費・支援金はこちらまで

【金融機関】ゆうちょ銀行

【加入者名】南天会

【口座番号】01380-0-90164

「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。

※他金融機関からの振込用口座番号

店名(イチサンキュウ)一三九店(139)

当座 0090164

会員種類と年会費

支援会員 10,000円(会費+支援金)/年

一般会員 5,000円/年

学生会員 2,000円/年 (※大学生まで)

※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。

一般会員令和4年入金済→ 一般R4

Syncable (シンカブル) から寄付ができます

オンラインで会費や支援金の決済ができる寄付プラットフォーム Syncable に団体登録しました。インターネットで Syncable を検索していただき、「団体を探す」→「南天会」で寄付ページを開けます。各キャンペーンも行っておりますので、ご参照ご紹介ください。

Syncable (シンカブル)QR コード



龍尾言

10月にはアンバードカル博士が仏教への改宗式を行った月です。今年日本では、29日に相模原市で記念祭が開催され、私も参加させていただきました。そこで久しぶりに高山龍智師とお会いした時、佐々井バンテージの願いとは何か、という話になりました。私たちはバンテージを見ているが、バンテージの望みは、バンテージが見ているものを、私たちも見ることなのだ、と。バンテージが命をかけて守ってきた人たちと、日本の人たちも共に同じ仏教徒として生きていって欲しい、彼らを見守り続けて欲しいという思いです。この思いの実現に向けて、進んでいきたいと思っております。(小池)

南天会事務局



〒179-0075

東京都練馬区高松 4-16-3-102

小林三旅(090-4538-2677)

佐伯隆快(090-5304-8955)

メール nantenkai@gmail.com

南天会フェイスブック・ツイッターご利用ください

